届け、教室へ⑲

山形大大学院准教授
渡部 泰山

歴史として記憶する

山形新聞 . 17.24.6.25

仙台市博物館を会場として16日、日本藝術学関連学会連合の公開シンポジウムが開催された。これまで比較的大都市で開催されることが多かった大会だが、今年は初めて東北で開催された。「地域」を奪われた3・11以降の東北、そこで人は何を考え、なにをなすべきか―。何よりそのことが本年度の学会の「地・人・芸術〈芸術と地域〉を問う」という基本的テーマに集約されていた。

筆者もささやかな研究報告とディスカッションのパネリストの一人として参加させていただいた。シンポジウムは緊迫感にあふれ、実に示唆に富む大会であった。

冒頭、公開シンポジウムの趣旨説明に立った広島大学の金田晋名誉教授は、3・11以降の東北の人々の心の痛みにふれながら、広島原爆投下による破壊、その後の復興、とりわけ芸術が果たした役割について哀悼の意を込めて語った。その後、研究者たちの報告を聞きながら、私たち日本人は再び取り返しのつかない過ちを繰り返してしまったのではないか、という思いが頭から離れなかった。

仙台からの帰路、青々とした木々、鳥のさえずり、水が蓄えられた田園の風景、人々の語らいが通り過ぎていった。地震、大津波、放射能汚染で1万6千人にも及ぶ失われた命が、蜃気楼（しんきろう）のかなたに消えていった。再びめぐり来る、東北の夏を待ちわびていたはずの人たちである。

報道されて終わったのではない。やるせない思いを鎮め、生き残った私たちは、地の霊となった人のかなわぬ願いを聞き届け、何をなすべきなのか、何ができるのか。深く思慮しなければならないのはこれからである。

東北大の芳賀満教授が、研究報告の最後に「個人に忘却は許される。しかし国家や社会に忘却や諦観（ていかん）は許されない」と述べ、「冥福を祈るとは死者を忘れないことである」と、締めくくった。忘れないということは、日本人の歴史として記憶するということであろう。教育に携わるすべての者に、この歴史を子どもたちに語り継いでいく意味と責任があると思う。

＝隔週で掲載します